
羅漢十無双

水銀の使い手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羅漢十無双

【Nコード】

N6609Y

【作者名】

水銀の使い手

【あらすじ】

なんと！？あのバカでバグで変態である英雄『ジャック・ラカン』が恋姫の世界に！？

この小説は駄文、ご都合主義、主人公最強、キャラ崩壊などの成分が含まれております。それにアレルギー反応が起きる方はスルーして下さい。

そうでなければ小学生の頃に描いた『ぼくがかんがえたすごくつよいぶき』といった黒歴史のノートが友達を家に誘ったさいに見つかる確率が大幅に上がります。

更新速度は気合が出てきたらす。

プロローグ（前書き）

さてはて、なんかノリで書いてみましたよ。原作とか三国志とかあまり知識が無いが頑張ろうと思う。

プロローグ

褐色肌の英雄は消された右腕を『千の顔を持つ英雄』で補い武装する。

——帝国九七式破城槌型魔導鉄甲！！！！——

褐色肌の英雄の右腕は巨大な機械の腕へと変化する。それを見て白髪の青年は眉を顰めた。

「：あなたに似合わぬ無様な武器だ。なぜだ：？
なぜあなたはそんな顔で戦える？全てが無意味だと知らされながら」

「いや、あなたは既に知っていた：10年前、いや、20年前のあの日からMM上層部がひた隠しにするこの世界の秘密に」

「この世界の無慈悲な真実に。
絶望に沈み神を呪うもおかしくはない真実だ。事実これまでに、僕が見てきた者は皆そうだった」

「なぜだ？ 真実を知り、尚、20年：なぜあなたは、この意味なき世界をそんな顔で飄々と歩み続けられる？」

白髪の青年は問いた。対峙している褐色肌の英雄に。褐色肌の英雄は「ほ」と小さく驚きの声を上げる。

「：なんだ、てめえ
んなこともわかってなかったのか。

（てっきりわかってやってんのかと：）」

そんなことを思いながら、褐色肌の英雄は不敵な笑みを浮かべてその問いに解した。

「真実？ 意味？」

そんな『言葉』、俺の生にやあ何の関係もねえのさ」

その解に白髪青年は苦虫を噛み潰した表情をする。

「……ッ

ならば、その真実に焼かれて消え去るがいい。幻よ！！」

白髪青年は周囲に展開していた無数の石の黒杭を褐色肌の英雄に飛ばした。だがその黒杭を一発も当たらずに褐色肌の英雄は白髪青年の背後を取る。白髪青年はそれに気づき褐色肌の英雄の一撃を体を少しずらして躲し、拳の打ち合いが始まる。褐色肌の英雄は殺気に気づき顔を横にずらして白髪青年が放った『造物主の掟』の一撃を避ける。間髪入れずに白髪青年は地を踏み込み掌底を入れるが、それさえも躲し白髪青年の背後に回ると巨大な機械の腕と化した右腕を振り下ろし、一撃を与えてそのまま地面に叩き付けるようにして殴り付けた。その威力は凄まじく、殴り付けられた地面は隆起していた。

「ぐ・」

白髪青年は苦痛の声を上げるが、その程度であった。

「……これも無意味だよJ・ラカン、結果はもう決まっている」

そう言った白髪青年に褐色肌の英雄——ジャック・ラカンは口

角を吊り上げながら返す。

「けど、楽しかったろ？」

ガチンッ、と巨大な機械の腕の肘に付いていた杭が音を鳴らし、

「もちっと楽しめや、『フェイト』」

ゴッ・・！！！！、と轟音を上げて杭が撃たれそれに連動して追加の一撃を白髪の青年——フェイト・アーウェンルクスに食らわした。

・ ・ ・ ・ ・

ラカンがフェイトにデカイ一撃を与えた後、自分の存在する限界を悟り弟子である赤毛の青年——ネギ・スプリングフィールドに後を託して桜の花びらが散るようにして消え去った。ラカンが消えた後、ネギは怒りのあまり暴走状態になり、『闇の魔法』の影響で半魔物化してフェイトを攻撃するものの消えたはずの英雄の一撃により暴走状態が解かれる。フェイトはその英雄に心底呆れて転移してその場を去り、ネギはそれを止めようとするが英雄に止められる。そして消えたはずの英雄——ラカンは再び弟子の前へと現れた。

『よっ』

「ラ：ラカン：さ：ん：」

『これか？気合だ。』

全ては気合で何とかなる。』

ラカンは弟子の相談役兼パートナーの一人である長谷川千雨が持っている『いどの絵日記』をちらっと見る

『：どうやら世界の真相には到ったようだな』

『なら、話は早えぜ。』

見てのとおり、奴らはその世界の秘密に繋がる力を得たみてえだ。わかるな？俺じゃ、今の奴らにてんで敵わねえって訳だ。奴らを止められるのはお前達だけだ！！』

「……！！」

『まあ、ガキのてめえに世界を背負えとまでは言わねえ。アスナを頼む』

「え：」

『奴らが造物主の力を得ている以上、ホンモノのアスナは向こうの手にあると考えるべきだ：』

「え：」

「！？」

「ラカンさん今なんて！？」

『おう嬢ちゃん！』

チサメ嬢ちゃん！』

「な、なんだ私かよ？」

『今の暴走でわかるとおりコイツはまだまだだ。
バカやらねえように見ててやってくれねえか。
嬢ちゃんが一番コイツを見てる。頼むぜ』

「なッ…」

ババ、バカ言ってるじゃねえよ。何で私が！？そういう役目は神楽坂一択だろうがよッ！！』

顔を赤くしながら千雨は返す。

『今、お前達の傍らにいるアスナはおそらく偽物……。替え玉の幻だ……。』

気合で再び現界出来たラカンだったが、それも限界が来たらしく身体の下半身は消え、上半身も少しずつ消えていく。

「なッ…」

「：！！」

『いや…：偽物とは言えねえか。俺や…：この世界のように…：』

消え去りながらもニツとラカンは笑う

「あ…：ラ…：カン…：さん…：」

『へっ：じゃあなばーず。闇に喰われるなよ』

上半身は消え去るが左腕だけ残り、弟子の肩へと置き別れと告げる。

「ラカンさんっ」

『後ろじゃねえ、前を見て歩け。』

前を見て歩き続けるヤツに、世界は微笑む。』

「ラカンさんッ」

ネギは悲痛に天上に向けて叫ぶ。

そして一人の英雄はこの場から退場するのであった……。

————それがとある物語の始まりだと知らずに……

白い空間（前書き）

まだ序章みたいなもんです。次からは入ります。

白い空間

「んあ？此処は：」

長髪で筋肉質の褐色肌の大男――ジャック・ラカンが目覚ますと、ガリガリと頭を掻きながら上半身を起こして辺りを見回す。辺り一面は白く、自分以外の気配は無かった。

「此処がフェイトが言っていた『完全なる世界』か？」
コスモ・エンテレケイア

「ずいぶんとシケてんな」とラカンはぼやき、よっこらせと立ち上がってボキボキと首を鳴らした。

「しかし、ホントに何も無いな此処：」

ラカンは愚痴りながら白い空間を歩き続ける。しばらく歩いていると目の前に何かが落ちていたのを発見し、それを拾い上げる。

「手紙か：？」

宛名は：：：って、俺かよ：」

ラカンは手紙を裏返し宛名を調べると自分の名前だったことに驚く。そして内容を確認するため手紙を開ける。

「えーっと、何々？

『貴方にはこれから三国志の世界へ行ってもらいます。三国志といっても外史（それに似た平行世界）なので歴史が変わっても本史に影響しないので大丈夫です。』

：：：なんだこりゃあ？三国志って確か、魏・呉・蜀の三国が争覇し

たつていうやつだろ？アレの漫画呼んだ事あるが、あんま覚えてねえんだよな……。ん？二枚目があるな：」

ガシガシと頭を掻きながら二枚目を読む。

「『そうそう、その外史にいる武将達は全員女性に性転換していますからイロイロと楽しめると思えますよ？しかも美少女揃いです。』……って、マジかよ！？あの髭面のオッサン達が女性に：しかも美少女になって、想像付かねえな……。と、三枚目があるな。」

だけど面白そうだなこの世界、と興味津々になりながら三枚目を見る。

「『ただ一つだけ注意することがあります。その外史には“真名”というものがあります。“真名”というのは姓・名・字以外の名であり、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼び掛けると問答無用で斬られるほど失礼に値するので悪しからず。』……って、マジかよ。知らなかったら普通に呼んでいたな。こりゃあ感謝するぜ。お？これで最後だな。」

ラカン最後の手紙を見る。

「『これで最後です。必要無いと思いますが一応念の為、仮契約カードの『千の顔を持つ英雄』を使えるようにしました。裏に続く。』べつに剣使わなくてもいいんだがな。拳こぶちの方が強えし。」

そうばやきながらぺらりと手紙を裏返す。

「『書くことも無くなったのでこれで説明は終わりです。尚、説明

が終わるとこの手紙は自動的に燃えて貴方は穴に落ちて外史の世界に行ってもらいますので注意して下さい。』……って、は？」

ボツ、と手紙が燃えたと同時にラカンの足元から大きな穴が出現する。

「ぷーさんけるなあああああー……」

間抜けの声を出し、悲鳴を上げながらラカンは深く深く穴へと落ちていった。

ラカンが穴へ落ちた後、白い空間に一人の黒衣を身に纏う青年が現れた。フードを被っていて顔はよく見えないが赤い毛がチラツと見えた。

「その世界を救ってくれ。頼むぜジャック・ラカン……いや——
好敵手」
ジャック

黒衣の青年はニッと笑うと霞のようにして姿を消した。

そして誰もいなくなった。

白い空間（後書き）

最後のは何となく入れたもんなので、とくに深い意味は無いです。

・・・誰だか解りますよね？

最初っからクライマックス

成層圏から引力に従い地上へと落下しながら、ジャック・ラカンを考えていた。あの手紙を書いた奴をどうやってぶん殴ろうと。顎に手を添えて数分考え、ラカンは考えるのを止めた。

「（それにしてもあの筆記。どこかで見たことがあるんだよな。どこだっけな〜）」

ふむ、と顎をさすりながら思い出すがなかなか出てこない。最終的に「ま、いっか!」と自己解決して思い出すのを止めた。

「お。地上が見えてきたなって:」

なんか戦争中じゃね?、とラカンは下を見ながら零す。

確かにラカンが言った通り黄色い布を付けた賊達と軍らしき人達が戦っていた。

「確か黄巾の乱ってやつだったか?

ふむ……よし! アデアット」

ラカンは何を思い付いたのか『千の顔を持つ英雄』で大剣を出し、それを掴んで重いつきり投げる。大剣は物凄い速さで地上に向かっていき地面に突き刺さると、轟音が鳴り響いてそこを中心にして地に亀裂が入る。それによって軍と賊の動きが止まる。

「ふんっ」

ギュルルルと勢いよく空中で体をねり五回転し、

「ほっ」

くるくると空中で三回転し、

「とうっ」

ドオンッ！と地面に突き刺さった大剣の柄の上に着地し、違う大剣を出現させてそれを持ち肩に担いで口を開きこう言った。

「戦闘中失礼！ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！いっちょやろうぜッ」

唐突のラカンの登場に軍と賊はポカーンしている。

「どーしたー。来ねーのかぁー！
来ねーならこっちから……いくぜッ！」

ラカンはそう言うのと近くにいた二、三人の賊を斬り捨てた。それだけでは止まらずさらに五人の賊を斬り捨てる。そこでやっと軍と賊は現実から戻り、賊は仲間を殺されていることに気付いて憤慨してラカンへと襲い掛かり、軍は賊を倒していることから味方だと考えるがそれでもラカンの警戒は怠らず賊を倒していく。

「ほらよっ」

「ぐえっ」

「ぐぎゃっ」

「ぐあっ」

ラカンが突っ込んできた三人の賊に大剣を一振りして、絶命させる。

「死ねええー！」

「おらよッ」

「ぐがあっ！」

後ろから襲撃してきた賊を回し蹴りで吹き飛ばす。

「一人一人じゃ勝てねえ！ 囲め、囲めえッ！」

馬に乗っているリーダーらしき人物が賊に命令し、ラカンを囲んだ。賊に囲まれたラカン焦ることはなくそれどころかピュッと口笛を吹いて余裕の表情をしている。

「余裕ぶっこいてんじゃねええーっ！！！」

それが気に触ったのか囲っている賊達は一斉に襲い掛かってきた。ラカンは避けるそぶりもせず、大剣を肩に乗せる。“殺った！”と賊達はそう確信したが、その幻想は粉々に打ち砕かれた。

「なっ！？」

剣の刃がラカンに刺さらなかったのだ。いくら力を入れようが、刃は肉に食い込みすらない。

「あ？ もう終わりか？」

男だったらもっと力入れろよ。お前ら全員玉無しか？」

ホジホジと鼻クソをほじりながら賊達にそう言い捨て、ラカンハ「ハアッ」と気を放出して囲っていた賊達を吹き飛ばした。

「食らえっ！必殺『人間砲弾（今命名）』！」

ラカンは賊の頭を掴むと賊に向かって投げる。掴んでは投げ掴んでは投げてを繰り返し、どんどん数を減らしていく。

「ひひひひーッ！！！！？」

「逃げろおおおーっ！！！！？」

「オラオラオラァッ！逃げてんじゃねえーッ！それでも〇〇〇〇付いてんのかーっ！！！」

また賊を掴んで投げるラカン。ラカンは不覚にも『やべえ、これ楽しい』と思ってしまった。

数分後。飽きたのか『人間砲弾（今命名）』をするのを止めて大剣で賊を斬るのに変えた。

——キィィィンッ！！！！

「おほっ」

「……」

と金属音を鳴らし、ラカンが振るう大剣を一人の小柄の少女が剣で受け止めた。その少女は今まで斬ってきた賊とは違うことにラカンは察知した。

「やるじゃねえか」

「……」

無言のまま少女はラカンに斬り掛かる。ラカンはそれを受け止め、拳を繰り出す。少女はそれを後ろで跳ぶことにより回避し、ラカンとの距離を取った。

「……ッ!？」

「おらよっ!」

しかしその距離は一瞬にして詰め寄られ、右ストレートが放たれる。

「ッ!？ カッ……」

それに何とか反応し、剣でガードするものの予想以上の威力によりガードした剣は真つ二つに折れて、衝撃で少女は吹き飛ぶが空中で一回転して体勢を整えた。

「…ハア…ハア…ッ…」

少女は肩で息をし、顔を苦悶と疲労の表情を浮かべる。

「どーしたー嬢ちゃん。もう終わりかー？」

それとは打って変わりラカンが疲労の“ひ”の字も浮かべておらず、それどころかまだまだ全然余裕であった。

：：まあラカンと同じ強さを持つバカ（ナギ）と13時間戦って決着つかずに引き分ける程体力と気力があるぐらいだからな。それに公式バグだしね。

「ハア：ハア：。フウ：：：ッ！」

少女は息を整えると何処に隠し持っていたのか短剣――ジャマダハルを両手に握ると物凄い速さでラカンに駆け寄っていった。

「さすがにそれは無傷じゃすまされそうにないなっ！」

ラカンは持っていた大剣を捨てて『千の顔を持つ英雄』で鉄甲を出して嵌め、対応することにした。

「フッ：：：！」

「よっ」

「ハッ：：：！」

「ほっ」

「チッ。ハアアアア―ッ！」

「無駄無駄無駄無駄無駄アッ！」

少女の右フックを軽くないなし、右フックの反動を殺さず回転して裏

拳を放つも少し顔を後ろに反らすことで回避される。少女は舌打ちをし、ラッシュを打ち込んだのでラカンはそれにラッシュで対応する。

キーンキーンキーンキーンキーンキーンキーンキーンキーン
——ッ！！！！！！

と短剣と拳の打ち合いで金属音が鳴り響き火花を散らす。速さは互角。だが威力はラカンの方が上で徐々に少女が押されていく。

「へっ。嬢ちゃん、なかなかやるじゃねえか。」

そんな嬢ちゃんに免じて少し本気で戦ってやるぜっ！」

「なッ……くっ……!？」

ラカンのラッシュの威力と速さが上がり、少女は完全に押されていく。

「ラカン！超手加減した右チョップっ！」

「ガハッ!？」

一瞬スキが出来た少女にラカンは超手加減したチョップを放つ。それを喰らった少女は地面に叩きつけられて、そのまま気を失った。

「安心しろ。寸止めだ。」

キラ☆と歯を輝せながらラカンは気絶した少女にそう言った。：少女を中心にしてクレーターが出来てるのは気のせいだろう。いや気のせいだ。（反語）

「敵大将の首！この華雄が討ち取った！！！」

『オオオオオーッ！！！！！！』

敵大将の頭を掴み上げて高らかに宣言する、露出が多い服装をした少女——華雄とそれに歓声を上げる軍。どうやら戦いは終わったようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6609y/>

羅漢†無双

2011年12月1日02時46分発行